

ジョシュア 珍しい神経症状

著者：Phil Zeltzman

訳者：望月 一飛

ヒストリー

3歳、去勢雄、ビーグル、珍しい神経症状のため外科診察を希望して紹介来院。飼い主によると尾が上がらなく、時々尾を動かしたり振ったりすると痛みが生じる。排便困難と時々排尿困難も認められた。たまに右後肢を噛んでいた。時々筋肉のけいれんが認められ、飼い主は痛みのためであると考えていた。主治医によってステロイドとトラマドールで治療していたにもかかわらず、臨床症状は悪化していった。

身体検査と神経学的検査

身体検査は正常範囲内だった。

神経学的検査では右後肢の固有位置感覚は問題なく、反射は正常であった。異常所見は下部脊椎の触診時の痛みだけであった。

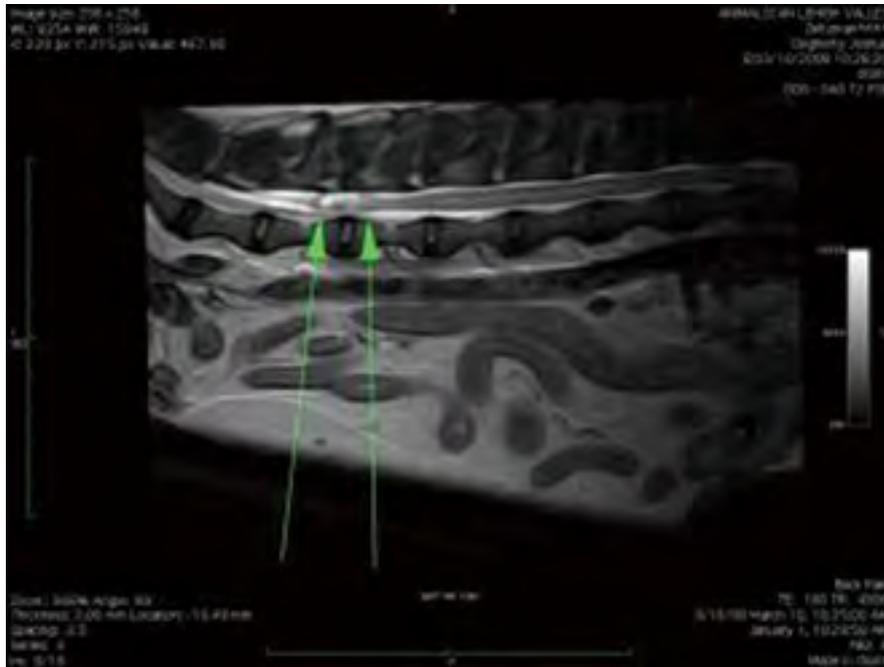
第一印象

ビーグルは椎間板疾患の好発犬種であるが、ジョシュアの場合は椎間板疾患を発症する典型的な年齢ではなく、通常みられるような症状では無かった。ヒストリーは明らかに正常ではないが、飼い主との話し合いの結果、さらなる検査を実施することとした。我々は下部脊椎に神経学的問題があると推察した。

精密検査

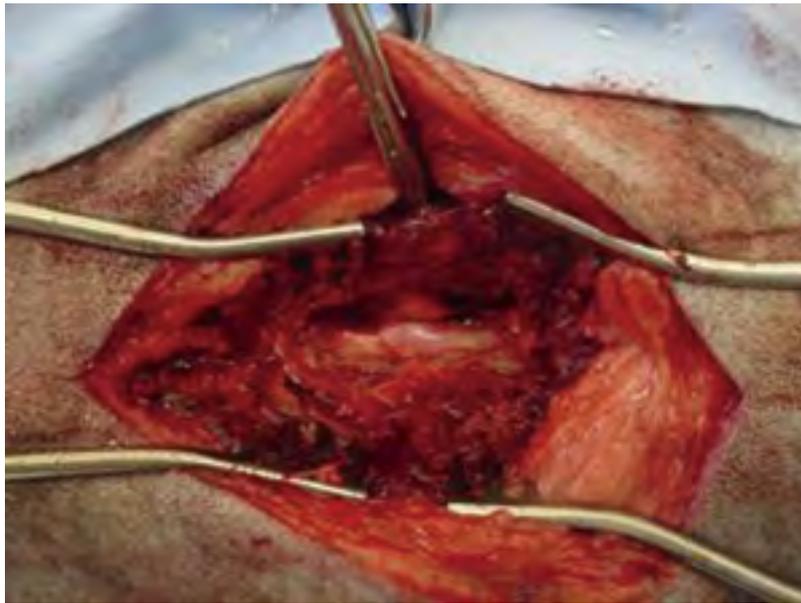
麻酔前の血液検査は正常範囲内である。腰部脊椎のMRI検査が推奨された。L5-L6間の硬膜内髄外の脊髓背側に腫瘍が認められた(図1,2)。それらの所見に基づき、腫瘍を除去できることを期待して、また脊髓の圧迫を確実に解除するために、試験的な外科手術が薦められた。

Joshua has strange neurological signs

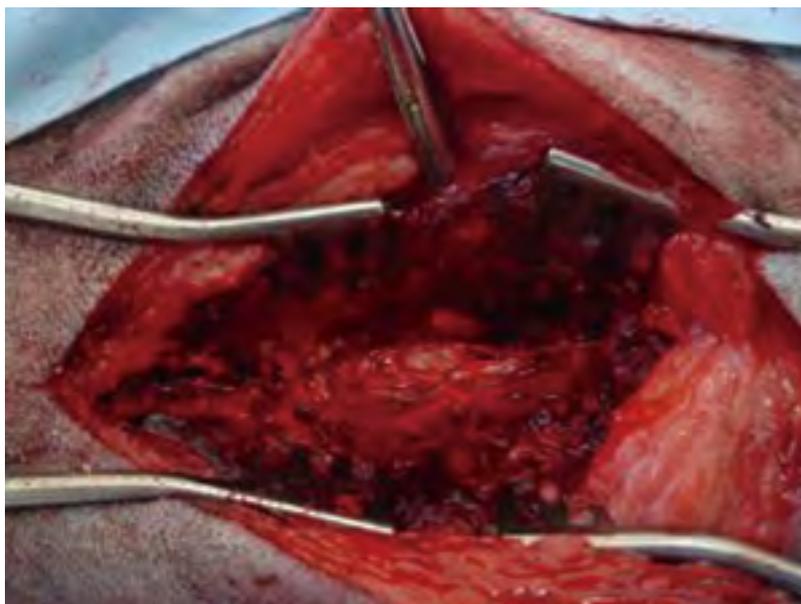


治療

L5-L6 間で背側椎弓切除術が行われた。腫瘍は脊髄の背側に確認された。腫瘍は髄内（髄膜の内側）硬膜外（脊髄の外側）に存在した。完全に除去することは難しかった。そのため減量手術を行い、腫瘍の約90%を除去した。侵襲的な手術であったにもかかわらず、ジョシュアは術後数時間後には歩き始め、固有位置感覚も正常であった。



■ 図 3



■ 図 4

病理組織検査

病理組織検査の結果は、軟骨肉腫（軟骨の悪性腫瘍など）であった。腫瘍が髄内であることと、椎骨に接していないことから、病理診断医はこの腫瘍は de novo であると考えた。



■ 図 5

予後

術後 2 日後に退院し、厳格な運動制限を指示した。1 日に数回、排泄のために 5 分間、リードを繋いでの散歩は許可した。セファレキシンとトラマドールを処方した。

軟骨肉腫はゆっくり成長する腫瘍であるため、分裂速度が速い細胞に対して効果のある化学療法や放射線療法は、ジョシュアには対象外であった。

2 週間後に皮膚のステープラーは除去された。尻尾を振る時でさえも、もはや痛みは無かった。

手術してから数ヶ月後、突然便と尿を時々失禁するようになった。デキサメサゾンを処方し、高繊維食を与えることで、症状はすぐに軽減した。

手術から 11 ヶ月後、時々痛みがあることに飼い主が気付いた。アマンタジン (50mg SID) が追加で処方された。

コメント

今回の症例報告から、飼い主が珍しい臨床症状について説明した時、その説明を退けないことが重要であるということがわかった。その症状を詳しく調べ、脊髄のより詳細な画像診断を行い、外科手術を行うことで、幸せな結末を迎えることができた。ジョシュアは術後数ヶ月間、素晴らしい QOL を維持することができた。